

を生む資本の流れを生ずるように干渉するとすればおそらく資本の流れをストップさせた方がベターだという結論を導くかもしれない。つまり、以上のケースは理論的には興味があるが、著者の目ざす政策的意味をも持つものとしては再考の余地があると思う。国際資本市場が不完全である場合には著者が第3章第3節で分析しているように、自国が資本輸入国であれば外国の利子率は究極的に自国の資本の限界生産力水準まで引き上げられる。この時の資本輸出国である外国の状態を前記のケースにあてはめれば外国の1人当り消費水準は初期の水準より低下していることになる。(もちろん、外国は最適政策をとっているわけではないから前記ケースを直接に適用することはできないが)。

前記のケースは第5章の2国成長モデルとも関連がある。両国の貯蓄率が等しいが労働成長率が異なる時の均衡成長経路において究極的に対外債務が0に近づくケースの最適貯蓄は各国があたかも閉鎖経済であるかのようにふるまうことだと主張されている(第5章第4節)。しかしこの主張は労働成長率の高い第1国にはあてはまるが低い第2国にはあてはまらない。均衡経路上の第2国は相変わらず第1国に資本を輸出しており、しかも、第1国と第2国では等しい資本の限界生産力が支配している。つまり、この状態を第3章の状態に翻訳すれば第2国であらわされる外国の利子率が一定で資本輸出国である第1国がその資本の限界生産力が外国の利外率と同じでなければならぬという制約のもとでどんな最適貯蓄政策をとりうるかということである。前記のケースはこの問題に答えることができないと思う。[柴田 裕]

水田 洋

### 『アダム・スミスの文庫』

Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library. A Supplement to Bonar's Catalogue with a Check-list of the whole Library.* Cambridge, at the University Press for The Royal Economic Society, 1967, xix, 153pp.

従来のボナーや矢内原の編著がスミスの『カタログ』と題されているので、本書は題名どおり『文庫』と訳させていただく。

本書はアダム・スミスの蔵書カタログの完成をめざした、水田教授の多年にわたる探索と調査との成果の一半であって、1954年以来3回にわたるイギリスおよびヨーロッパ大陸での仕事にもとづき、文字どおり「探書

10年の旅の末に」公刊の用意を終えたものである。限られた枚数で編者の深い労苦——わたくしの敬意はそこにこそ向けられる——の跡はとうていたどれないから、以下では、この『文庫』の成立までのスミスの蔵書の運命と、そのカタログの作成史と、作成史上に本書の占める意義の説明とを、それぞれ簡略にしるして、読者を本書に近づける手引きともしたい。スミスの蔵書目録自体の大きい意義については、ここでは言及する紙幅がない。

アダム・スミスは質実な風格を持つ蔵書家であり、愛書家であった。彼は『国富論』の公刊から5年後の1781年に自分の書庫の簡単なカタログをつくらせたが、それは後述の矢内原カタログによって一般の利用に供されている。前者のカタログは1120点・2300冊をふくむが、それに記載漏れがなかったかどうかは別として(この問題については、J. VinerがJ. Raeのスミス伝の新版につけたIntroductionのp.120を参照)、その後の購入の分を加えて、スミスの没時には彼の蔵書は2800冊から3000冊に達したと推測されている。

このスミス文庫は、スミスから彼の若いとこのDavid Douglas(のちのLord Reston)にそっくり遺贈された。ダグラスはこれを良く保全したとされるが、わずかながらそのなかからの散佚が彼の生前にはじまっていると推定される根拠がある。いな、スミスの生前にさえ散佚はあったようでもある。ともあれダグラスの没後、スミスの蔵書は彼の2人の娘、Mrs. CunninghamとMrs. Bannermanとのあいだに、ほとんど機械的に等分して相続された。この両部分は、水田教授が確認しさらに推定したある部分だけを除いて、その後それぞれ独立の運命をたどることとなる。

バナマン夫人は1879年に死に、息子のDavid Douglas Bannermanが文庫を相続したが、彼は1884年と94年とに、その全部をエディンバラ大学のNew Collegeに寄贈した。だから、バナマン・コレクションからの散佚はないと信ぜられていたわけである。ところがカニングム・コレクションは、その多くが、カニングム夫人の夫W. B. カニングムの没時(1878年)にエディンバラで売立てられ、残りの一半は同年に息子のR. O. Cunninghamに相続された。後者は1918年に没したが、その生前に彼が教授をしていたベルファストのQueen's Collegeにスミスの蔵書の相続分の一部を寄贈し、残りは没後にロンドンの古本屋から売りに出された。1920年に新渡戸稲造博士が購入して東大の経済学部へ寄贈された141点・308冊がそれである。ただし、むろんこれらがR. O. カニングムの没時に残存したカニングム・コレ

クションの全部だという保証はない。

したがって、スミスの蔵書は1878年のカニングム・コレクションの売立てのおりにもっとも多く散佚し、その他の機会にもすこしずつ散ったのだが、それ以外にも、收藏しているはずの図書館で確認されていないものもある。しかし、上の売立てに出されたものの一部分は Hodgson と Nicholson との両教授が買い、前者は1880年にエディンバラ大学の Old College に、後者はその6冊がカーコーディの博物館に入った。J. Bonar が1931年にグラスゴウ大学中央図書館に寄贈したものと、H. S. Foxwell 教授の所蔵に帰したものととの大部分も、1878年に売立てられたものであろう。

ところで、フォックスウェルの手に帰したスミス文庫も、ロンドン大学の Goldsmiths' Library とハーヴァードの Kress Library とにいまでは2分されており、ここでも行方を見失われたものがある。そのほかアメリカではジョーンズ・ホブキンズ大学の Hutzler Collection がスミスの蔵書をふくんでいるし、スコットランドの H. Livingstone 氏もおなじく6冊を所蔵することを水田教授は発見したが、これはグラスゴウ大学に寄贈された。その他の所蔵者は機関と個人とで13ほどが判明しているが、それぞれの点数はきわめてすくない。京都大学も1点を蔵する。なお、東京大学のスミス文庫にはその後2冊が加えられた。

スミスの蔵書目録の作成の仕事は、すでに前世紀の末にはじめられた。すなわち上記のボナーによる、*A Catalogue of the Library of Adam Smith*, 1894 である。それはカニングム・コレクションが売立てられたあとであり、バナマン・コレクションのエディンバラ大学(New College)への寄贈が完了した年であった。この本の補充された第2版は1932年に出たが、それまでに1918年のカニングム・コレクションの2度目の売立てと、東京大学の購入とがあり、第2版は後者の目録からも20冊ほど追加している。ボナーはなおその後、1934年と36年とに *Economic Journal* 誌上に目録の追加を載せて亡くなった。それ以後、アメリカでは *The Vanderblue Memorial Collection of Smithiana... in the Kress Library...*, 1939 や、C. Jones の1940年の *Economic History* (Supplement to the *Eco. Journal*) での仕事の MacGarvey による完成、すなわち "Notes on Adam Smith's library ...," *Eco. Journal*, June 1949 などが発表されたが、1951年の矢内原カタログ—*A full and detailed Catalogue of Books which belonged to Adam Smith. Now in the possession of the Faculty of Economics, University of*

*Tokyo...*, by Tadao Yanaihara—の出版は、それが上記の1781年のスミスの蔵書目録を活字にしたことによってきわめて重要な意義を持つものとなっている。

さて、スミス研究家としての水田教授は、以上の歴史を前提として、スミスの蔵書目録の完成のためにつぎの4個の課題に直面することとなった。第1、ボナーのカタログの作成の仕方はかなり不備であり、書物の現物に接することを怠っているため、このカタログの欠陥を、できるだけ現物に即して正すこと。第2、旧スミス文庫の分散的な所蔵者のあいだには、いまでも小規模な変動があるし、古い所在が確認できなくなったものもあるから、それをたしかめること。第3、まったく新しい発見をも期待すること。第4、これはたいへん困難な作業であるが、もともときわめて不十分なかたちでつくられている1781年のカタログのいちいちの書目を、正確かつ詳細に表記して、ボナー・カタログの不備をこの面からも埋めること。

以上のうち、ボナーのカタログの不備については、アダム・スミスの会編『アダム・スミスの味』(1965)に収載された、水田教授の長編の報告「アダム・スミスの蔵書」に詳しい。なお、この報告のまえがきは、この『文庫』がイギリスで出版されるようになった機縁をも語っている。第2・第3の点についての教授の貢献もきわめて多く見いだされるが、とくに、上記のグラスゴウのリヴィングストン氏の蔵書の発見の意義は大きいし、カニングム家の裔の Miss Cunningham を探しあてたことも将来の収穫への期待を持たせるし、Old College にそのスミス文庫のカタログがないために今後も探索の必要があることや、バナマン・コレクションの入った New College には文庫の保管に手ぬかりのある事態を指摘して当局を反省させたことは、特記しておきたい事実である。これらの点もおなじく「アダム・スミスの蔵書」で知ることができる。なお、New College にカニングム・コレクションからの流入があることの指摘もある。第4の点についての苦労は想像に余りあるが、スミスの蔵書が諸外国のものにわたっているため、水田教授はパリやジュネーヴやヴァティカンにまで赴かなければならなかった。イギリスでの作業にあたってケンブリッジの P. Sraffa のきびしい批判に耐えつづけた水田教授の姿は、教授自身の旅行記『霧の国太陽の国』(1963)に、気楽な筆でながら描かれている。

イギリスのなかで、またアメリカやオランダで、この『文庫』の編者はあらたに直接に訪れたい場所をまだ残しているはずである。だが、こころざされた仕事はいち



おう終り、約480点とその2倍ほどの冊数とがボナー・カタログの第2版に新たにつけ加えられた。それは点数にしてじつに約44%の増加である。ボナー・カタログの冊数は約2240であるから、これにこの『文庫』による追加を合算すれば、スミスの没時の蔵書中現在不明のものはすでにきわめてすくないといえるであろう。

この『文庫』はボナー・カタログへの正確・詳細な追加書目以外に、その後半にボナー、矢内原、およびこの『文庫』のすべての書目を一覧できるようにした General Check-List をつけている。この部分では書目の記載はとうぜんに簡略だが、本書がその書名の副題としたようにたんなる A Supplement to Bonar's Catalogue でなく、事実上スミスの蔵書の最も標準的な総合目録であることが、ここから知られるであろう。ただ以上でわかるように、水田教授の作業の重要な一半を成した、ボナー・カタログの種々のまた多数の記載上の欠陥の修正は、この『文庫』の Supplement には示されていない。それは Supplement としての紙幅のつごうにもよるが、本書の出版を援助したイギリスの人たちの考えかたに限界があったからであろう。ボナー・カタログの修正の部分は、別に上掲の「アダム・スミスの蔵書」のほうに、89ページにわたってまとめられている。したがって、この『文庫』から Supplement を除いて上の「蔵書」の成果を付加したほうが、スミスの蔵書目録としてはまとまったものとなるはずである。だが、それは目下グラスゴウで準備が進行中の新しいスミス全集のなかでか、それとも独立のかたちでか、やがて実現されることが期待できるであろう。

アダム・スミスの文庫はその全貌があきらかになるにつれて、経済科学の成立の背景にあった広大な思想世界を顕示しつつある。この意味から、水田『蔵書』の功績は大きい。

[小林 昇]

スヴェトザー・ペヨヴィッチ

『ユーゴスラヴィアの経済』

Svetozar Pejovich, *The Market-planned Economy of Yugoslavia*. University of Minnesota Press, Minneapolis, 1966. xii, 160 pp.

1 ユーゴスラヴィア経済は1953年以後社会主義経済のひとつの特殊型として出発して以来それ自体としてきわめて興味ある研究対象である。また1966年以後のソ連の経済改革およびそれと相前後した東ヨーロッパ諸国の経済改革が、ユーゴ経済の従来とってきた方向とかなり

似た傾向をうちだしたという意味でも、その理論的実証的研究は社会主義経済学の研究者にとって、現在、きわめて興味ある研究対象である。しかし、ユーゴスラヴィア国民の手になるセルボ・クロアチア語のものを除く、英独露などわれわれの読みうる限りの国語での研究書は比較的少なく、その点、われわれの研究に大きな制約となっている。本書の出現は、そういう意味からいうと、数少ない研究文献に新しい1つを加えたという意味で歓迎される。

2 著者について評者は多くを知らない。この書物に記されている限りを紹介しておく、著者スヴェトザー・ペヨヴィッチ——正確にどう読むのかわからないので、かりにこうよんでおく——は、ユーゴスラヴィアの生れで、かつてミネソタ州のセント・メリー・カレッジで教鞭をとったことがあり、本書の出た1966年現在ダラス大学の教授であるという。本書を読んだ限りの印象だけからいうと、まだ若い人ではないかと思う。本書は、全体として非常に試論的な書物であり、理論的な部分がなまのままでしかもかなり教科書風に書かれてあるところへ、実証的な説明が提示され、そのかみ合せというか、実証的な説明の理論的な分析——を著者は志向しているのであるが——が十分に熟した形でなされているとは思われない点などからみて、経済学ないしスラヴ研究の分野で年期をいれた研究者とは思えない。

3 本書はその執筆の趣旨をのべた短い序文のあとに6章から成る本文を持っている。その表題を示すと、つぎのとおりである。

第1章 ユーゴスラヴィア経済の法制的構造

第2章 ユーゴスラヴィアの経済計画化

第3章 ユーゴスラヴィア経済の運営

第4章 ユーゴスラヴィアにおける企業(firm)

第5章 ユーゴスラヴィア経済運営の分析的説明

第6章 結論

以上の本文122ページにたいして、6つの題目について23ページの付論がついている。——1. カール・マルクスと資本主義から社会主義への転化の問題。2. カール・マルクスの科学的社会主義とユーゴスラヴィア社会主義との対比。3. ヨゼフ・シュンペーターの経済発展理論の若干の重要な特徴。4. 外国貿易、捕捉しうる限りの対外援助、国際銀行からの借款。5. ユーゴスラヴィア企業における労働者管理。6. (経済にかんする)公示文の挙例。これらの付論は、4と5とを除けば、本文における著者の立場を理論的にうらづけようとする意図でここへ入れられたもので、このようなやり方は著者がまだこ